

モニターから・編集室から

七号のモニター意見については、七号発行後僅かしか日時が経過していないため、まだ意見が寄せられていません。

そこで今号では、前号に掲載できなかった六号に対する意見三通を掲載させていただきます。

★「退職者特集」について

教職員 「いつも興味深く読ませてもらっている。一番思い出に残ること、後輩へのアドバイス、退職後の生活など、順序立てて語ってもらおうのほうでしょうか」「このままで良い企画。とにかく四十四名の方々の歩まれた人生の重みに圧倒された。写真も大きくて良い。多くの方があの大学紛争を取り上げておられるのも、へ地元千田が……の記事と併せて、感慨深いものがあつた」。

学外 「退職者（今期に特別な事情や問題があれば別）を、特集の対象にするのには首を傾げざるを得ない。昔を語り、業績を称え、別れを惜しむのは心情として分からぬでもないが、大学の広報誌としてどうだろうか。臍を曲げてみれば、退職者をかく扱う体質に官僚臭、役所の伝統を感じないでもない。精々、巻末になるべく目立たない扱いで、そつと滑り込ませる程度が常識と思うが……」

★「開かれた学問」について

教職員 「とても興味がある。門外漢なことの方が多いが、続けてほしい」「子どもの心（心の理論）は、内容として、そう単純に分類できるかどうか疑問が残るが、文章そのものは読みやすいものであつた。へ脳がステロイドをつくるは、素人には少し難しい」。

りやすい洒落たリード、写真やイラストによるビジュアル化、やさしく書く心掛け、素人に読ませる工夫がしてある（深田講師の具体的な文章も楽しい）。注文は、常に研究が一般人にとってどんな関わりがあるのか、どんな接点があるのかを考慮する。つまりは、「開かれた学問」である意味を、ほんの数行でもいいから文章化する視点を忘れないで欲しい。

細かい話では、今号の二本とも、文末の「最後に……」は不要だと思う。無の方がどんなに洒落ているか。また、脳が……の小見出し。敢えてしたのである、ニューロステロイドの重ね。繰り返すには意味がない。くどくてうんざり」。

★六号に対する印象・感想

教職員 「裏表紙が実に美しい。今まで（そして今号）も目次欄の景山氏の絵がモノクロであつたのが、極めて残念である。企画は良いが、惜しむらくは、否、腹立たしきは、字が読みにくい。読んでほしいという気があるのかを疑いたくなる」。

学外 「フォーラム・千田の思い出は、取り上げたこと自体はいい着想だつた。ただ、思い出の形で取り上げるのがふさわしいか疑問に感じた。もしそうなら、巻頭に載せるテーマではなからう。広大が千田を離れたことの功罪、問題点を整理し、どのように総括するのか、あるいはできるのか。最低限の方向を探って欲しかった。それには、今回のような寄稿に止めず、広報で一文書く手もあつた」。

細かい話では、地元千田……と、広大とともに……に共通するタイトルが必要。

「二〇〇〇字の世界」は期待しているコーナーである。留学生には少し荷が重いのではなからうか。個人的な希望を言わせてもらえば、たっぷり、含蓄とこくのあるエッセー欄に育ててほしい」。

★今号で興味深かった記事

今号では、すべての方がへ地元千田が……

を一番興味深い記事として挙げていました。「当時、学生コンパなどでお世話になった身としては、鈴木氏の証言が真実であることを疑わないが、残念なことに、氏の思いは、現実には必ずしも反映されなかった。ご冥福を心よりお祈りします」という意見も寄せられました。

フロッピー化（MS-DOSのテキストファイル）がなされていないと、編集作業が手間取ることを実感しました。原稿をお願いして気が引けますが、原稿のフロッピー化もしくは電子メールでの送付をお願いします。

また、原稿の締切の期日は守ってください。取材の広報委員は原稿を集めるのに必死で、そんなに強いは言えない立場にあることをご理解ください。

編集室から

モニターからのいつもながらの暖かい指摘ありがとうございます。編集室としては、モニターに限らず、もつとフランクに読者からの意見も期待したのですが、その数が意外と少ないのがっかりしました。

今号が第二十八期広報委員会が担当する最終号となりますので、今期の広報委員会の総括（この言葉は学園紛争後、連合赤軍が新聞を賑わせた時代には良く使われた）を試みたいと思います。

本誌は当然のことながら、大学構成員に早くて正確な情報を提供することを旨としました。それ以外にも、大学冬の時代」に対処するため、積極的に学外に広島大学をアピールする方策を模索しました。具体的には、受験生をターゲットにして高校に配布する一方、就職難の昨今、企業に広島大学を印象づけ、少しでも本学卒業生の就職を支援することを考えました。

歯学部の問題で学外モニターから指摘がありました。歯学部長は部長連絡会議で大略次のように説明されました。「歯学部の将来を考えると、今からは免疫が必要になる」と。これは歯学部の一つの見識であり、何も問題はないと考え、本誌では取り上げませんでした。

★編集室のボヤキ

広報は大事だという発言は聞きますが、広報活動をするにはそれなりの人と金が必要。現在は限られた予算の中で、広報委員と事務官とももの奉仕（自発的に）に行い、それに喜びを感じるのならボランティアであろうが、現状はそうとは思えない。よって広報活動は支えられています。

私も広報は大事だと考えていますが、広報活動は短期的にすぐ結果が出るものではなく、継続しなければならぬものだと思います。本学が本当に広報を大事だと思えば、編集に専念できるスタッフを一名でよいから置いて欲しい。

広報委員に限らず、各種委員会の委員長や委員を決める場合、いつもうまく逃げる人がいる。要領の悪い奴が、大役を仰せつかって苦労することになる。大役を仰せつかる、その分、研究と教育が手薄になる。研究と教育が大学の柱だから、今の価値判断だと、要領の悪い奴は大学には不要ということになる。要領の良いことが大学教官に必要な資質であらうか。

しかし、いずれも郵送料がかなりの額に上り、今期は検討の段階で、来期予算の裏付けを取った後に実施に移すことになるでしょう。

本誌の編集作業は、広報調査係の事務官二名に全面的にお世話になりました。しかし編集作業は事務官の本務ではなく、時間外に、まさに命がけて取り組んでくださいました。

今期は、広報委員会内に編集小委員会を作り、広報委員を編集作業にタッチさせてみました。しかし実際にやってみると、広報委員は全く役に立たず、逆に事務官の足手まといになったというのが現状です。その際原稿の